

# 博物館ノート

日本にいた象

## ステゴロフオドンゾウ

ゾウの仲間には脊椎動物の中の長鼻目ちゆうびもくというグループに属してはいますが、現在、地球上で見ることが出来る長鼻目はアフリカゾウとインドゾウの二種類だけです。しかし、ゾウの化石の研究からは、過去の地球上には三百種類以上のゾウの仲間が現わ

れたことがわかりました。

ステゴロフオドンゾウも

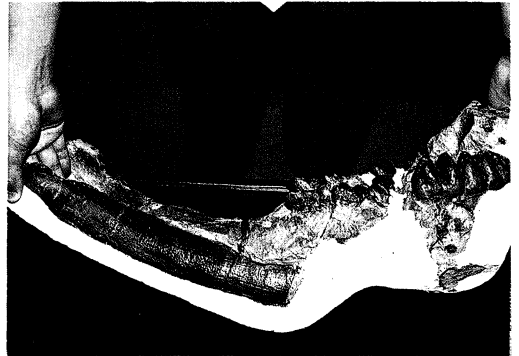
そのような絶滅したゾウの仲間の一つで、今から一千万年以上も前、アフリカからユーラシアにかけて広く分布していました。このゾウの化石は日本でも多く見つかっており、本県でもいわき市で立派な下顎骨の化石が発見されています。

ステゴロフオドンゾウは、ゾウの進化系列上ではその中ごろに位置し、今日のゾウとは異なった原始的な形質が多く見られます。大きさはインドゾウに比べてもだいぶ小さく、鼻もあまり長くなかったようです。また、下顎にもキバがありました。ゾウの歯は、水平交換といって、古くなった歯が歯ぐきの前の方へせり出してぬけ落ち、後ろから新しい歯が現われる、という独特の生え替わり方をしますが、そのしくみも今日のゾウとは少し異なっていたようです。

下段の図は、ステゴロフオドンゾウの生活ぶりを推定して描いた図（古生態復元図）です。ゾウの主食は樹木の若芽や果実ですから、図のように広葉樹林のある温暖な環境下で生活していたと考えられます。



▲いわき市産のステゴロフオドンゾウ下顎骨



▲宮城県柴田町産のステゴロフオドンゾウ  
上顎骨(写真は複製品、博物館展示資料)

▼ステゴロフオドンゾウ古生態復元図

